

日本性感染症学会第38回学術大会を開催して

(2025年12月20・21日 ウィンクあいち)

渡辺 大輔

愛知医科大学皮膚科学教授

日本性感染症学会第38回学術大会は、2025年12月20日から21日にかけて名古屋駅近くのウィンクあいちで開催されました。愛知医科大学主催としては第13回(2000年/野口昌良先生)、第26回(2013年/三嶋廣繁先生)以来、3回目、皮膚科学教室主催としては第6回(1993年/新村真人先生)、第17回(2004年/川島 眞先生)、第24回(2011年/本田まりこ先生)、第33回(2020年/石地尚興先生)以来、5回目となります。昨年の第37回大会と同様、すべてのセッションを対面による現地開催といたしました。

た。年末の慌ただしい時期の開催となり、また天候も生憎の雨模様でありましたが、800名を超える皆様にご参加いただき、また活発な討議も行われ学術大会を盛会裏に終えることができました(図1)。

大会テーマと概要

今回の大会テーマは「温故創新」としました。これは、「温故知新(故きを温ね新しきを知る)」の「知」を「創」に変え、過去の伝統や先人の知恵・技術を深



図1 医局員の集合写真

く学び、それを土台として新たな技術や価値を創造(イノベーション)するという意味の言葉になります。実際に性感染症でも新規の性感染症の側面をもつエムボックスや、近年爆発的に増加している梅毒、薬剤耐性クラミジアなど、過去から学び、これからも考えていかなければならない課題が山積しています。本大会では、「過去から学ぶ」ために、本田まりこ先生、荒川創一先生、川名 尚先生という文字通り3人のレジェンドによる「レジェンドトーク」セッションが行われました。また70以上の一般演題発表に加え、4つの特別講演、4つの教育講演、6つのシンポジウム、ミニレクチャー、そして共催シンポジウムを含む9つの共催セミナーが催されました。そのほか、例年恒例となった日本性感染症学会と日本エイズ学会の合同シンポジウム、「認定士への集い」、そして学会終了後にはこれも恒例となった市民公開講座も開催されました。

こだわりのプログラムと懇親会

今回大会長としてとくに力を入れたのは、皮膚科主催となったこともあり「みえる性感染症」としての教育講演(「プライベートパーツを診る」「梅毒の皮膚病変について」「目で診て診断するエムボックス」)やシンポジウム(「これも性感染症(疥癬, ケジラミ, 手指HPV)」), ミニレクチャー(「尖圭コンジローマの臨床像と治療—当科で経験した170例の検討—」)を組んだことです。幸い、多くの方から好評をいただきました。また、私が取り組んできた研究分野の1つであるワクチン関連では特別講演として「戦略的基礎研究で挑む単純ヘルペスウイルス感染症とワクチン開発の展望」(川口 寧先生, 東京大学医科学研究所), 「名古屋スタディ:リアルタイムにおける研究批判と研究の妥当性」(鈴木貞夫先生, 名古屋市立大学大学院医学研究科公衆衛生学分野)と、現在のトピックスについてご講演を賜りました。そのほかにも最新版である『性感染症 診断・治療ガイドライン2026』の発表や、性被害や性感染症から若い女性を守る取り組みの紹介など日本性感染症学会らしい多職種の多彩な取り組みの紹介ができたのではないかと思います。



図2 「棒の手」



図3 クラフトビールと日本酒

学術大会は学びの場であるとともに交流の場でもあります。1日目の夜には会員懇親会が開催されました。愛知医科大学がある長久手市にゆかりのあるものとして、愛知県の無形民俗文化財である長久手の民俗芸能「棒の手」の演舞披露(図2)や、長久手市にあるクラフトビール醸造所「Totopia Brewery」のビールや愛知県産の日本酒が振る舞われ(図3), 会員の交流もよりいっそう深まったものと思われ。皆様に満足していただける学術大会にできたのではと自負しております。

おわりに

2026年の日本性感染症学会第39回学術大会は川名 敬会長(日本大学医学部産婦人科学系産婦人科学分野主任教授)のもと、東京都で開催されます(2026年11月14・15日, テーマは「性感染症の未来～人類未踏の世界へ」)。「温故創新」からの連続でわれわれにどんな未来をみせていただけるのか, 非常に楽しみです!

(※本文中に記載の所属は2025年3月時点)